

昔ながらの手植えに挑戦

秋の収穫が楽しみ

5月中旬になると町内では、農業体験を通して自然とふれあってもらおうと、田植えの催しが開かれました。

それぞれ昔ながらの手植えで行われ、参加者は、泥んこになりながら苗をていねいに植え、農産物のできる過程を学びました。



泥んこになりながら田植えを楽しむ児童たち

米づくりを体験し 農業の大切さを学ぶ

自然と触れ合いながら作る喜びを学んでもらおうと、5月16日、根雨小学校田植え式が、同学校近くの水田で開かれました。

保護者たちの声援を受けながら、学年別に分かれ、水田約5㍍にもち米の一種、スズハラモチの苗をていねいに植えました。

児童たちは「田んぼの中は温かい」秋にはたくさん穂を

つけてほしい」などと言いつけながら楽しんでいました。

田植えは、勤労学習の一つとして毎年行われ、農業を使わない有機栽培で育てています。10月に刈り取り、来年の1月には、もちつきをして収穫を祝います。

農業体験を通して 交流を深め情報発信

農村体験を通して里山の良さを知ってもらおうと、5月18日、菅福地区のジゲおこし



山菜料理を囲み話もはずむ

グループによる「里山ものつくり大学」(小谷博徳代表)が開かれました。

初回のこの日は、田植えを体験しようと、町外から9人が参加。同地区内にある小谷延明さん所有の水田20㍍に、12㍍に育ったコシヒカリの苗を植えました。

初めて田植えを体験した富田寛さん(米子市)は「今日は、植える苦勞を通して、米一粒一粒の大切さを感じました。今後の催しにもぜひ参加したい」と話していました。

田植え後には、山菜料理などが振る舞われ、参加者は「こんなに山菜が採れる環境がうらやましい」などと料理を味わいながら、地元の人々と交流を深めていました。

今後、同大学は、炭焼きやソバ打ち、たくあん作りなど

年間を通してたくさん催しを企画。小谷代表は「自然豊かな里山は私たちの自慢です。農村体験を通して交流活動と情報発信を積極的に行いたい」と話していました。

田植え唄のリズムに 合わせて植える

米づくりを通して自然と触れ合ってもらおうと、5月24日、田んぼの学校(日野高校主催)が、同学校の水田(約10㍍)で開かれました。

催しには、町内外から10人が参加。米子田植え唄保存会(石田千代子代表)による田植え唄のリズムに合わせてながら15㍍に育ったコシヒカリの苗を植えました。

田んぼの学校は、年間を通して、水田除草や井手川の水質調査などをする環境学習なども企画されています。



田植え唄が青空に響く